



診察の順番を待つマイドゥグリの人びと。MSFは、毎日約100人の栄養失調の子どもを診察した。(2024年8月)

特別対談
患者に寄り添う
心理士
×
政府に働きかける
アドボカシー担当

「笑顔という花」が咲くように。 ナイジェリアの人びとのために私たちが 全力で取り組んだこと

日頃から、国境なき医師団 (MSF) の活動をご支援くださいます、誠にありがとうございます。
失われていた母子の笑顔を取り戻した心理士と、医療を行きわたらせるための提言活動に想いを込めて
取り組んだアドボカシー担当。二人がナイジェリアで見たもの、感じたことを、共に語ります。

ベヒシュタイン はじめまして。2024年12月にナイジェリアから帰国しました。荒木さんもナイジェリアの北部で活動されていたんですよね？

荒木 はい。23年2月まで、マイドゥグリにある栄養失調の子ども向けの小児科で臨床心理士として活動してきました。ボコ・ハラムなど大小の武装勢力が活動している地域です。

ベヒシュタイン そうなんですね。身の危険を

感じたことはありませんでしたか？

荒木 安全確保のため、街の周囲に四重の堀が巡らされていて、病院もその中にあったので大丈夫でした。ただ堀の外では紛争や衝突が絶えませんでした。紗良さんは初めての海外派遣ですよ？

ベヒシュタイン MSF日本の事務局で6年間働いた後、試験を受けて夢だった海外派遣に行きました！ アドボカシー担当として首都のア

Profile

写真右 **あらき きょうこ** (心理士)
荒木京子

派遣期間 ⇨ 2022年7月～2023年2月
黒柳徹子さんの『トットちゃんとトットちゃんたち』という本を中学生の頃に読んで、国際協力に関心を持つ。世界には苦しんでいる人が多くいることを知り、目をつぶったまま生きていくのは違うと思った。大学院で臨床心理の修士課程を修了後、日本で心理士に。2016年から国際協力機構(JICA)に参加し、2年間ケニアで活動。21年にMSFに初めて参加し、ナイジェリアなどに派遣される。

写真左 **べひしゅたいん さら** (アドボカシー担当)
ベヒシュタイン紗良

派遣期間 ⇨ 2024年4月～2024年12月
高校に通っていた時、アパルトヘイトについて話を聞き、世界で起きている不平等について考えるようになった。大学時代にタンザニアに留学し、路上で生活する子どもを目の当たりにして、人道援助の分野に関心を持つ。大学卒業後、製薬会社に就職。その後、大学院で公衆衛生学の修士課程を修了。17年にMSF日本の事務局に入職、現在に至る。



© MSF

ブジャにあるオフィスと、栄養失調治療や小児治療を行うバウチの拠点を行き来していました。スタッフの9割がアフリカ圏の男性で、思い描いていた多国籍チームで働くというイメージとは少し違って、ナイジェリアの企業に入ったような感覚でした。

荒木 それは少し緊張しますね。息抜きはどんなことをされていたんですか？

ベヒシュタイン 8年続けている合気道をナイジェリアでもやってきました。

荒木 ナイジェリアに道場があったんですか？それは良かったですね。

歌とマッサージで 母と子の笑顔と絆を取り戻す

ベヒシュタイン マイドゥグリの栄養治療センターを受診するのはどんな方が多いのですか？

荒木 武装勢力による紛争から逃れてきた大人や子どもがほとんどでした。小児科では2歳以下の患者さんが多く、お母さんが一緒に入院していました。ピーク時には栄養失調の子どもが入院するベッド数が50床から800床に増えました。

ベヒシュタイン バウチも患者さんが多かったのに、病棟が静まり返っていた様子が印象的でした。子どももお母さんも虚ろな表情なんです。

荒木 マイドゥグリでもとても静かでした。お母さんの中には、性被害を受けた方もいるし、うつ状態の方もいました。

ベヒシュタイン どんな状況に置かれていた人びとなんですか？

ナイジェリアってどんな国？



人口 ○ 2億2380万人
面積 ○ 92万3773平方キロメートル(日本の約2.5倍)
民族 ○ ハウサ人、ヨルバ人のほか、推定250以上の民族
言語 ○ 英語(公用語)、各民族語
産業 ○ 農業、原油、天然ガスなど
その他 ○ 映画製作が盛んで、「ノリウッド映画」と呼ばれ親しまれています。
※外務省「ナイジェリア連邦共和国 基礎データ」(「その他」を除く)

「お母さんが楽しみながら自然に
子どもと関われるような活動に
取り組みました」(荒木)



© MSF

荒木 武装勢力に拉致され強制結婚させられて望まない子どもを産んだ人が多かったです。そのせいで心理的葛藤を抱え込み、生活にも困って、ネグレクトに陥り、結果的に子どもが栄養失調になってしまう。2歳でも8カ月くらいにしか見えない子どもが多くいました。カルテを見ないと実際の年齢が分からないんです。

ベヒシュタイン 深刻な栄養失調ですね。

荒木 子どもは特に生後3年間で、養育者との関わりによって、言語、運動、認知、社会的スキルを学びます。養育者との愛着を含む関係形成が困難になると、脳の発達も阻害され、その後の生きにくさに繋がってしまうことがあるんです。

ベヒシュタイン それはなんとか解決したいで

●MSFの活動について

MSFはナイジェリアで1996年に活動を開始。紛争から逃れてきた人びとへの援助や、母子保健の改善、栄養失調の子どもたちへの対応、感染症対策、「顧みられない熱帯病^{※1}」の治療など活動内容は多岐にわたります。



栄養治療食を食べる入院中の赤ちゃん。

※1 経済的に苦しく、極めて悪い衛生環境で暮らす人びとに多い、21の疾患群。治療法の研究や普及などから取り残されている。



避難民キャンプにて。病院では、退院していく患者さんの姿を見ることが幸せだった。

すね。どんなプログラムを行ったんですか？

荒木 栄養失調の子どもは食欲不振や不活発になりがち。加えて、皮膚が敏感になるという症状もあって、触られるのを嫌がるが多い。そうすると、お母さんもストレスを感じてしまい、母子の愛着関係を築くことが難しくなります。そこで、お母さんも楽しみながら子どもと関わられるように、歌いながら子どもにマッサージをするプログラムを行いました。歌で子どもの言語の発達が促され、体を動かすことで運動機能が促進されて、ボディタッチによって愛着も形成されるんです。

ベヒシュタイン どんな内容なんですか？

荒木 「お口はどこ？」「ここだよ」というようなふれあい遊びの歌を現地スタッフにハウサ語などに訳してもらって、毎日食後に3回、スタッフも含めてみんなで歌ったんです。次第に、お母さんたちからも歌声が溢れるようになりました。退院後も習慣にして続けてもらいたいと思って、お金がかからず、道具もいらない方法を選びました。

ベヒシュタイン 続けてもらうことって本当に大事ですね。

荒木 着任当初は入院している母子の笑顔あまり見ませんでした。この活動を始めてからは病棟に「笑顔という花」が咲くようになったんです！歌ってマッサージをするということが現地でブームになってくれるのが夢ですね。

将来を見据え、現地の人びとが医療を担える基盤をつくる

ベヒシュタイン バウチでは栄養失調の子どもが急増し、重要課題となりました。インフレや気候変動の影響で食料が手に入らなくなり、栄養失調に。そうすると免疫力が落ちて、はしかやマラリアなどの感染症にかかりやすくなり、食べることもできなくなって栄養失調が深刻に

なる、という悪循環です。医療ニーズはとて大きいのに、バウチは援助団体から見過されていました。というのも、ナイジェリアの北東部と北西部ではそれぞれ人道危機が起こっていて、その間に位置するバウチはニーズが見えにくいのです。

荒木 そういう地域のことを外部に発信していくのもアドボカシーの業務の一つなんですね。

ベヒシュタイン はい。広報部と連携してバウチで記者会見を開き、4～6月の栄養失調の患者数が前年の3倍になっていることを発信し、ワクチンの接種を呼び掛けました。多くの記者が出席し、バウチの現状を発信してくれました。最初の一步になるといいと思います。

荒木 栄養失調と感染症の悪循環を止めるためには、栄養失調の治療だけでなく、ワクチン接種も必要ですね。

ベヒシュタイン そうなんです。日本のようにワクチン接種の体制が整っていないので、ワクチンを接種していない子どもがたくさんいます。だから、MSFの病院に来てくれた患者さんの人数や症例のデータを揃えて、政府に予防接種の体制の構築を提案する、というのもアドボカシーの役割です。MSFはいつか撤退します。その時に現地の行政と地域の人びとだけで医療を担っていけるような基盤をつくっていきたいと考えています。

荒木 ナイジェリアの医療体制はぜい弱。突然全ての援助団体が撤退したら、多くの人びとが命を落としてしまいます。

ベヒシュタイン おっしゃる通りで、実はナイジェリアでは、すでに多くの団体が資金減などを理由に活動を縮小・停止しています。一方、MSFはその穴を埋めるためにプロジェクトを拡大したり、感染症の危機が迫った際には迅速な援助を行ったりしています。MSFは必要とされる時に必要としている人びとに医療を届け



会見には大勢の記者が集まり、バウチの状況について熱心に耳を傾けてくれた。



「バウチの人道危機を知ってもらうために、記者会見を開きました」（ベヒシュタイン）

られる。独立性を担保できている、支援者さまからの寄付のありがたさが身に染みました。

荒木 それは、私も常に痛感しています。本当にありがたいことです。

未来を変えるために、それぞれの役割で今後も活動が続けたい

ベヒシュタイン どうして臨床心理士という道を選ばれたんですか？

荒木 子どもの頃からよく「考えすぎ」と言われていたような欠点が、心理学では考える力や思慮深さとして強みになることと、国際協力の仕事に携わるのが中学生の頃からの夢だったことから、MSFの心理士になりました。国や文化を超えて、患者さん、スタッフ、関わる全ての方と、苦しみも喜びも分かち合えることが私の原動力です。

皆様の支援により、確実に多くの命が救われています。いから感謝致します。——荒木京子

明るい未来を一緒に作りましょう。——ベヒシュタイン 紗良

2024年度版の活動報告書はウェブで！

2024年度のMSF日本の財務状況・活動報告は6月中旬に国境なき医師団ウェブサイトで公開予定です。▶▶▶



発行元／特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階
寄付のお申し込み・お問い合わせは、**通話料無料 0120-999-199**（平日9:00～18:00／土日祝日、年末年始休業）